

胃がんとは？

日本人の死因の第4位。50歳代後半から60歳代の男性に多く見られるが、最近では検査・治療の進歩により、死亡率は減少傾向。早期胃がんの5年生存率（診断から5年後に生存している割合）は90%以上で、現在は早期発見・早期治療により治る可能性の高いがん。危険因子としては、喫煙や過剰な塩分摂取、ピロリ菌感染があげられる。

がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針（胃がん検診抜粋）

検査方法：問診及び胃部エックス線検査または胃管内視鏡検査

対象者：50歳以上 当分の間40歳以上の者を対象としても差し支えない。特に勧奨をする者50歳以上69歳以下

受診間隔：2年に1回 当分の間胃部エックス線検査を年1回実施しても差し支えない

検査結果：胃部エックス線写真については、十分な経験を有する2名以上の医師が読影すること

胃内視鏡検査においては、日本消化器がん検診学会のマニュアル（ダブルチェックの必要性）を参考

胃がん検診における不利益（デメリット）・高齢者のがん検診

- 内視鏡検査を受けると、胃の場合で1万人に一人、胃に穴が開いたり出血したりすることが報告されている。また、レントゲン検査による被曝もある。いずれも極めて低い可能性だが、注意深く検査を行ってもこのような偶発症が起こる可能性をゼロにすることはできない。
- 高齢者は胃部エックス線検査で飲むバリウムをうまく排泄できず、強い便秘や腸閉塞を起こす可能性がある。また、検査台からの転落の可能性もあり、骨折される方もいる。特に腕力や脚力に自信の無い方、腰が曲がっている方は危険。

出典：とうきょう健康ステーションHP

調布市の胃がん検診実施状況

検診体制

○対象者：胃部エックス線検査は30歳以上 胃管内視鏡検査は50～68歳の偶数年齢

○受診間隔：胃部エックス線検査 年1回 胃管内視鏡検査 2年に1回偶数年齢

（内視鏡検査を受けた翌年はエックス線検査及び内視鏡検査は受診不可）

○自己負担：内視鏡検査2,000円（胃部エックス線は無料）

○周知方法：個別通知：35～55歳は5年毎、60歳以上は毎年

申込み制：上記以外の年齢

※いずれも昨年度内視鏡検査受診者は除く

○検診場所：個別通知者のうち55歳以下の胃部レントゲン検査は保健センターで集団検診

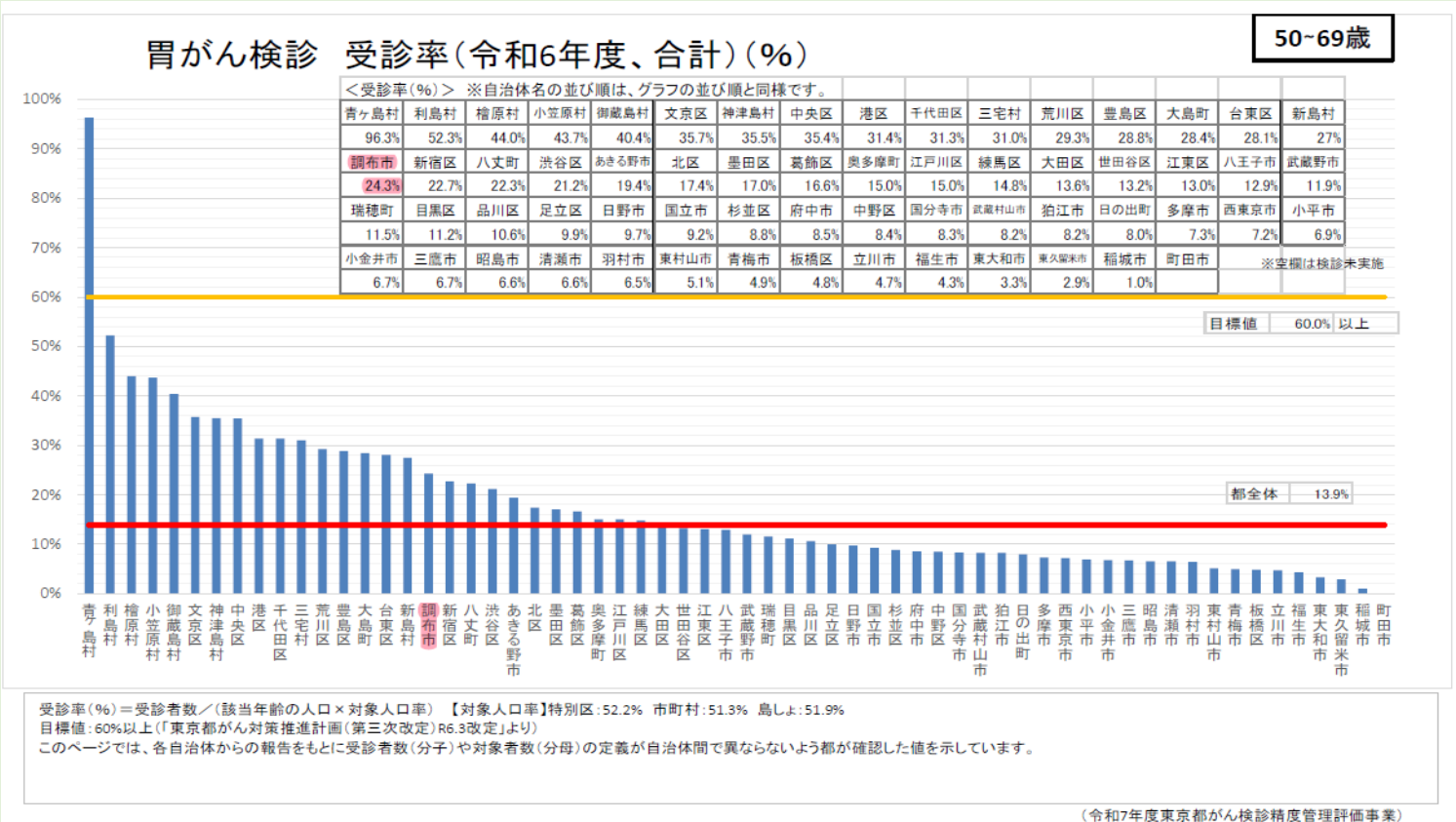
上記以外は市内委託医療機関で個別検診

○検査結果：二人の医師（うちひとり消化器の専門医）で確認。

胃がん検診について

調布市の胃がん検診実施状況

現状と課題



- 課題
- ・国の示す対象年齢以外(40歳未満)も対象
 - ・60歳未満は個別通知が5年毎になり、申込みをしないと受診できない
 - ・70歳以上は内視鏡検査が受けられない
 - ・毎年胃部エックス線検査を受けることによる被爆
 - ・個別通知や申込み制、集団や個別等年齢によって受診方法が違うためわかりづらく煩雑
 - ・胃部エックス線検査が可能な医療機関の減少

調布市のがん検診体制のあり方に関する提言書(抜粋)

- 提言 1 科学的根拠に基づく国の指針に沿ったがん検診の実施
- 30代の胃がん検診の廃止を含めた制度の見直しや、胃バリウム検査の検診間隔の適正化に向けて、早急に検討すべきである。
- 提言 2 受診率の向上とわかりやすく受診しやすいがん検診体制の構築
- 国の指針により「特に受診勧奨するもの」とされている年齢の市民に対しては、優先的に受診勧奨、再受診勧奨を実施すべきである。
- 提言 4 安全で効果・効率性の高いがん検診の実施
- 胃がん検診においては、提言 1 で触れたとおり、国の指針でも示されているように、胃バリウム検査の間隔を2年毎にし、エックス線照射による不利益を最小限に抑制することや、内視鏡検査の上限年齢を引き上げ、より安全に検診が実施できるように検討すべきである。

今回の協議の論点

提案①

- 指針で対象とされていない30代の廃止及び「当分の間」とされている40代に対する検診の取り扱いについて
 - ・30代の検診を廃止するのはいかがか。
 - ・40代を申込み制とし、5年間の経過措置後終了とするのはいかがか。

提案②

- 胃部エックス線検査集団検診を個別検診に移行
 - ・市民の利便性の向上とわかりやすい検診体制にするため、胃エックス線検査における集団検診を廃止し、個別検診に統一するのはいかがか。

提案③

- 胃部エックス線検査の受診間隔を2年に1回とする
 - ・照射による被ばく量を最小限に抑制するため、胃部エックス線検査における受診間隔を内視鏡と同様2年に1回とするのはいかがか。

提案④

- 内視鏡検査における上限年齢の廃止
 - ・より安全に検診が実施できるよう、現在の上限年齢の設定を廃止するのはいかがか。

提案⑤

- 胃がん検診は偶数年齢とする
 - ・市民や医療機関にとってわかりやすい検診となることが期待できるため、偶数年齢としてはいかがか。

提案⑥

- 特に勧奨する年齢への受診勧奨をする
 - ・勧奨すべき年齢(50～69歳)と70代の偶数年齢に受診券を送付するのはいかがか。
 - また、「当分の間」とされている40代と、個人の体調・体力の差が大きく、検診の利益・不利益や安全性を考慮する必要のある80歳以上は申込み制の体制をとるのはいかがか。

実施方法（例）

- 偶数年齢を対象とする
- 40代は胃部レントゲン申込み制
- 50～78歳偶数年齢に受診券送付 胃部レントゲン・内視鏡を選択
- 80歳以上申込み制 胃部レントゲン・内視鏡選択

実施例に基づく試算

胃内視鏡自己負担2,000円

	胃部レントゲン		胃部内視鏡		総額
	予定 受診者数	検診費用	予定 受診者数	検診費用	
合計	1,944	35,166,960	6,523	133,290,982	168,403,672

実施した場合の受診率予測

33.6%

受診率＝（（前年度の受診者数）＋（当該年度の受診者数）－（2年連続受診者数））／（当該年度の対象者数）×10

※受診者数及び対象者数は50～69歳